

## 旧仙台藩領における明治前期の輻輳地 The Accumulated Places of the Early Meiji Era in the Sendai Fief

後 藤 雄 二\*  
Yūji Gotō

(1987. 7.16 受理)

### 論 文 要 旨

旧仙台藩領を例として、明治前期における集落の規模、数、機能の相互関係に及ぼす近世の影響について考察した。順位規模曲線によれば旧城下町仙台の優位性はうかがわれるが、地方知行制が行われていたため小城下町的集落の発達により上に凸の形になっている。次に郡単位で集落の規模と数との関係をみると4タイプに分けられる。旧城下町仙台、港町石巻のように遠隔の地域との関係の強い都市を除けば、徒歩交通に依存していた時期であった当時においては強い階層構造は形成されず、商業機能からみればほぼ均等な機能量の分布がみられたといえる。集落の分布は小城下町的集落を形成する大身家臣の所領分布との関連が強い。これらの集落は交通変革によりあるものは都市へと成長をとげ、あるものは地方町にとどまることになるのである。

### 1. はじめに

明治期は、近世と近代とが並存していた時期と考えられる。このなかでも明治前期、ここでは、一応明治20年頃までのことをいうが、この時期には近世の影響が強いと思われる。交通についてみれば、全国的には主に河川交通、徒歩交通に依存していた時期である。森川(1962)は明治初年の都市分布について全国的展望を行ない、マクロにみれば地域の人口密度と、また、ミクロにみれば、藩領関係、城下町の有無などの歴史的事情が反映していると述べている。それでは、旧藩領内では都市的集落の分布を規定する要因は何であったろうか。本論では森川のいうミクロなスケールで、明治前期における都市的集落分布の構造、すなわちそれらの規模、数、機能の相互関係について、近世の影響を考察することを目的とする。

本研究では、一つの事例として旧仙台藩領をとりあげた。仙台藩は、現在の宮城県、岩手県南部、福島県の一部および数カ所の飛地を藩領とし、城下町仙台を中心とする表高62万石の大藩である。近世初頭の元和の一國一城令により多くの藩では破却された城が、地方知行制の仙台藩では例外的に認められた白石城のほかにも残され、その集落は「要害」、「所」などとして大身の家臣が支配していた。城、要害、所は城または居館および家中屋敷、町屋などから構成されている。これらは格式の差を示してはいるが、規模の差をそのまま表すものではない。したがって、これらをつつにまとめることができる。このような事情を有する旧仙台藩領における明治前期について検討する。

資料としては、明治12年の「共武政表(第3回)<sup>1)</sup>」を使用した。これは陸軍参謀本部による詳細な地域調査で、以後の「徴発物件一覧表」に連なるものである。共武政表には、人口100人以上の輻輳地について、戸数、人口数などが記載されている。輻輳地とは家屋が密集している地点であり、各集落を示しており、行政単位で集計された資料とは異なる長所がある。人口規模が大きいことは必ずしも中心性を有することを意味しないので、中心集落という用語を使用せず、ここでは都市的集落または共武政表でいう輻輳地という語を使用した。

\*弘前大学教育学部社会科学科教室  
Department of Social Studies, Faculty of Education, Hirosaki University

はじめに、輻輳地の全体的な性格づけを行ない、次に、よりマイクロにみるために郡単位で分布の特徴を、それぞれ、近世との関連からみることとする。なお、本分析では、仙台藩領に取り囲まれている支藩の一閩藩をも地域的連続性を考慮して対象地域とした。

## 2. 旧藩領全域についての分析

図1は100人以上の輻輳地について順位規模曲線を描いたものである。100人以上の輻輳地は、旧仙台藩

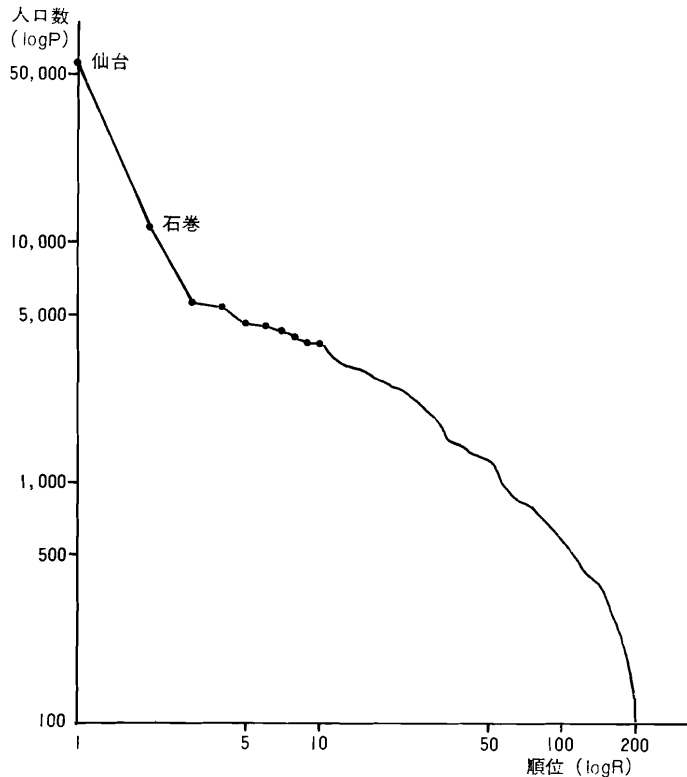


図1. 輻輳地の順位規模曲線（明治12年）  
資料：「共武政表」

領では199あるが、第1位が仙台、第2位は北上川河口の港町石巻である。この図からは仙台の人口の卓越性と曲線が上に凸になっていることがわかる。西村（1980）は、明治初期に旧藩領人口の5～20%が旧城下町に集中していることを指摘している。仙台には7.6%が集中しているが、これは他の藩と比べて低い値である。これは仙台藩においては近世を通じて地方知行制が実施され、侍の在方居住が行われていたことが原因である。またこれは、特に大身侍が要害など、小城下町の集落を形成していたことが理由として加わっていたといえる。他には資料の問題が考えられる。南部の伊具・亘理の両郡および三陸沿岸の本吉郡では200人以下の輻輳地が極端に少なく、記載もれのあることが想像される。しかし、200人以上について仙台、石巻を除いてもやはり上に凸であり、中規模な集落の発達<sup>2)</sup>が認められる。

次に輻輳地の性格を概観するために、地名辞典および宮城県史<sup>2)</sup>の付図により記載もれが少ないと思われる人口200人以上の輻輳地について近世末における機能分類を行なった（表1）。55,151人の仙台と11,575人の石巻を除くと、1,000人以上10,000人未満では城・要害・所（以下、要害系の輻輳地という）が48%で、規模の大きな輻輳地は旧要害系が半数を占めている。

表1. 200人以上の輻輳地の近世末における機能分類

人口(人)	城・要害所	町場町	宿場町	農業集落	漁業集落	その他	計
10,000 ~ 100,000	1 (5%)	1 (50%)					2 (100%)
1,000 ~ 10,000	23 (48%)	10 (20%)	12 (24%)	2 (4%)	2 (4%)		49 (100%)
500 ~ 1,000	13 (24%)	14 (26%)	12 (22%)	1 (2%)	11 (20%)	3 (6%)	54 (100%)
200 ~ 500	5 (7%)	9 (12%)	20 (27%)	15 (21%)	16 (22%)	8 (11%)	73 (100%)

資料：「日本地名大辞典（角川書店刊）」，「宮城県史2」

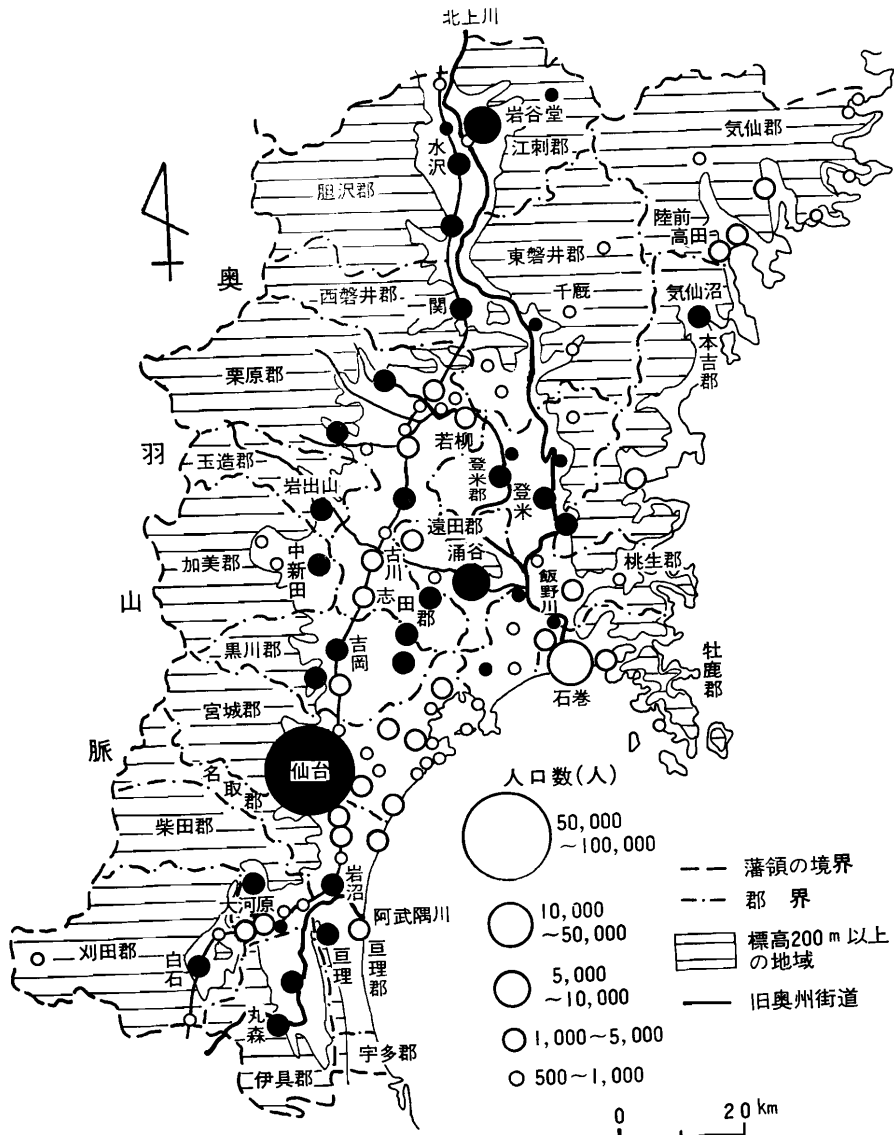


図2. 500人以上の輻輳地（明治12年）

黒くぬりつぶしたのは、城・要害・所であったことを示す。

資料：「日本地名大辞典（角川書店刊）」，「共武政表」

図2は人口500人以上の輻輳地の分布を示している。旧要害系の集落は北部および南部では主要街道または北上川や阿武隈川沿いにある。一方、中部の平野部では北上川の下流部および奥羽山脈沿いに配置されている。奥羽山脈沿いに配置されたのは、他領からの防衛のためと思われる。北上川の下流部及びその支流は近世に新田開発が盛んに行われた地域である。中部では奥州街道に要害系の集落があまり配置されていないことが注目される。北部と南部で街道に要害系の集落があるのは地形的な制約によるのであろう。図3は白石と、要害のなかで共武政表に記載されたものの人口数と近世にそこを領した家臣の石高との関係を示し

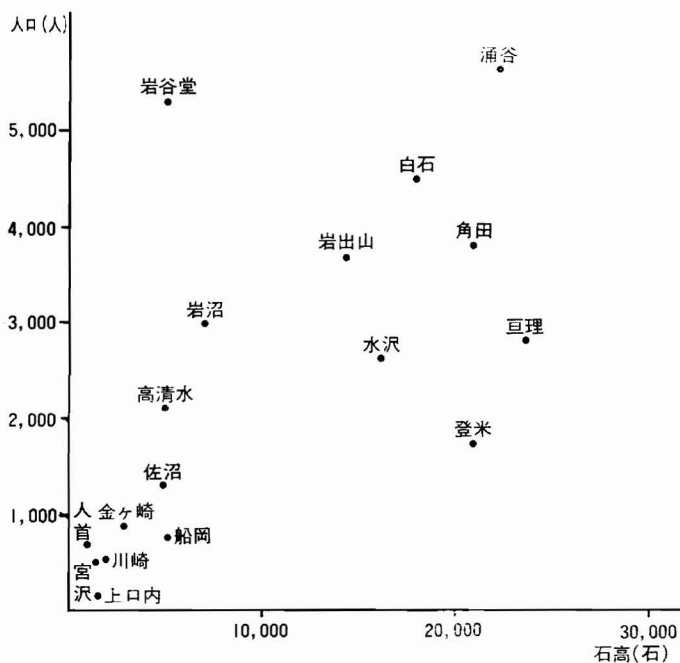


図3. 近世に城・要害を領有した家臣の石高と明治12年の人口数との関係  
資料：「共武政表」, 「宮城県史2」

たものである。全体的に正比例関係にあるが、岩谷堂が石高に比べて人口数が多いのは藩境の位置にあることが理由であろう。

仙台を有する宮城郡では他に要害系の集落はない。また、三陸沿岸地域では地形的な制約により200~500人の中で漁業集落が多い。

### 3. 郡を単位とする分析

次に、旧藩領内の小地域について輻輳地の分布とその要因について検討する。ここでは資料上の制約により、それぞれの面積が異なるという欠点はあるが郡単位でみることにする。しかし、旧仙台藩領のみの人口数が不明である宇多郡は省略する。またここでは、記載もれが少ないと考えられる人口200人以上のみを輻輳地として検討する。一般的に人口の多い郡ほど輻輳地が多いという傾向にあるが、必ずしもそうならない郡もみられる(表2)。そこで以下のような検討を行った。

図4は、第1位の輻輳地とそれを除く200人以上の輻輳地の平均的規模(郡人口に対する比率)との関係を表現している。ただし、ここでは輻輳地の記載もれが200人以上でもみられる伊具、亶理、本吉の3郡については考察から除外した。

表2. 各郡の輻輳地（明治12年）

郡名	郡の人口	第1位の輻輳地			200人以上の輻輳地	
		地名	人口	郡の全人口に対する比率	輻輳地数	各人口の合計の郡の全人口に対する比率
1. 刈田	26,589人	白石	4,508人	17.0%	8	29.4%
2. 伊具	33,567	丸森	4,070	12.1	2	23.5
3. 亘理	18,383	小堤(亘理)	2,847	15.5	2	28.0
4. 宮城	108,376	仙台	55,151	50.9	28	71.4
5. 名取	46,567	岩沼	3,034	6.5	12	25.7
6. 柴田	24,218	大河原	2,030	8.4	8	33.0
7. 黒川	22,430	吉岡	2,345	10.5	11	43.6
8. 加美	20,091	中新田	3,108	15.5	7	30.0
9. 玉造	16,421	岩出山	3,789	23.1	4	29.0
10. 志田	29,666	古川	4,617	15.6	4	33.0
11. 遠田	34,594	馬場谷地(涌谷)	5,611	16.2	4	23.7
12. 栗原	67,196	若柳	2,682	4.0	19	25.8
13. 登米	49,611	登米	1,773	3.6	8	12.8
14. 桃生	43,282	飯野川	1,309	3.0	11	17.8
15. 本吉	45,934	気仙沼	3,014	6.6	3	11.8
16. 牡鹿	31,652	石巻	11,575	36.5	11	58.7
17. 気仙	44,782	今泉(陸前高田)	1,433	3.2	13	19.6
18. 西磐井	36,550	磐井駅(一関)	4,293	11.7	3	15.8
19. 東磐井	57,076	千厩	878	1.5	12	9.8
20. 江刺	36,649	岩谷堂	5,366	14.6	5	20.0
21. 胆沢	43,073	水沢	2,663	6.2	3	13.3

資料：「共武政表」

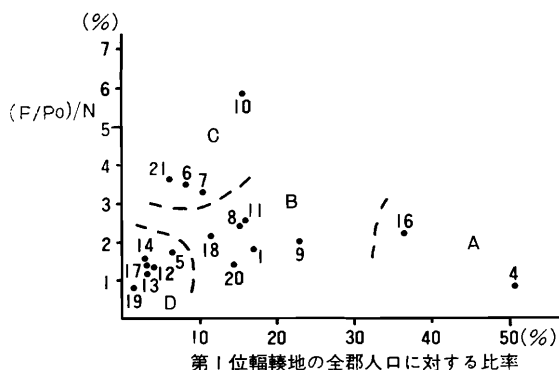


図4. 各郡の輻輳地分布のタイプ

図中の番号は表2の郡番号に対応する

P：(200人以上の輻輳地人口の合計) - (第1位輻輳地人口)

Po：郡の全人口

N：(200人以上の輻輳地の数) - 1

資料：「共武政表」

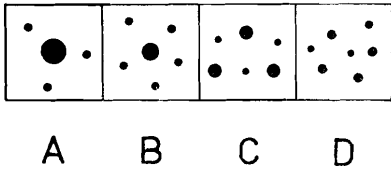


図5. 輻輳地分布のタイプ (概念図)

図4から4つのグループに区分できると考えた。図5に各タイプの概念図を示した。Aは藩領の中心的集落を含む郡で、仙台を含む宮城郡、港町の石巻を含む牡鹿郡がこれである。Bは卓越する集落が存在する郡であるが、Dは卓越する集落がないことを示す。Cはいくつかの中規模な輻輳地が存在する郡であるが、志田郡では郡人口に比べて相対的に規模の大きな輻輳地が多いといえる。以下で、B～Dの

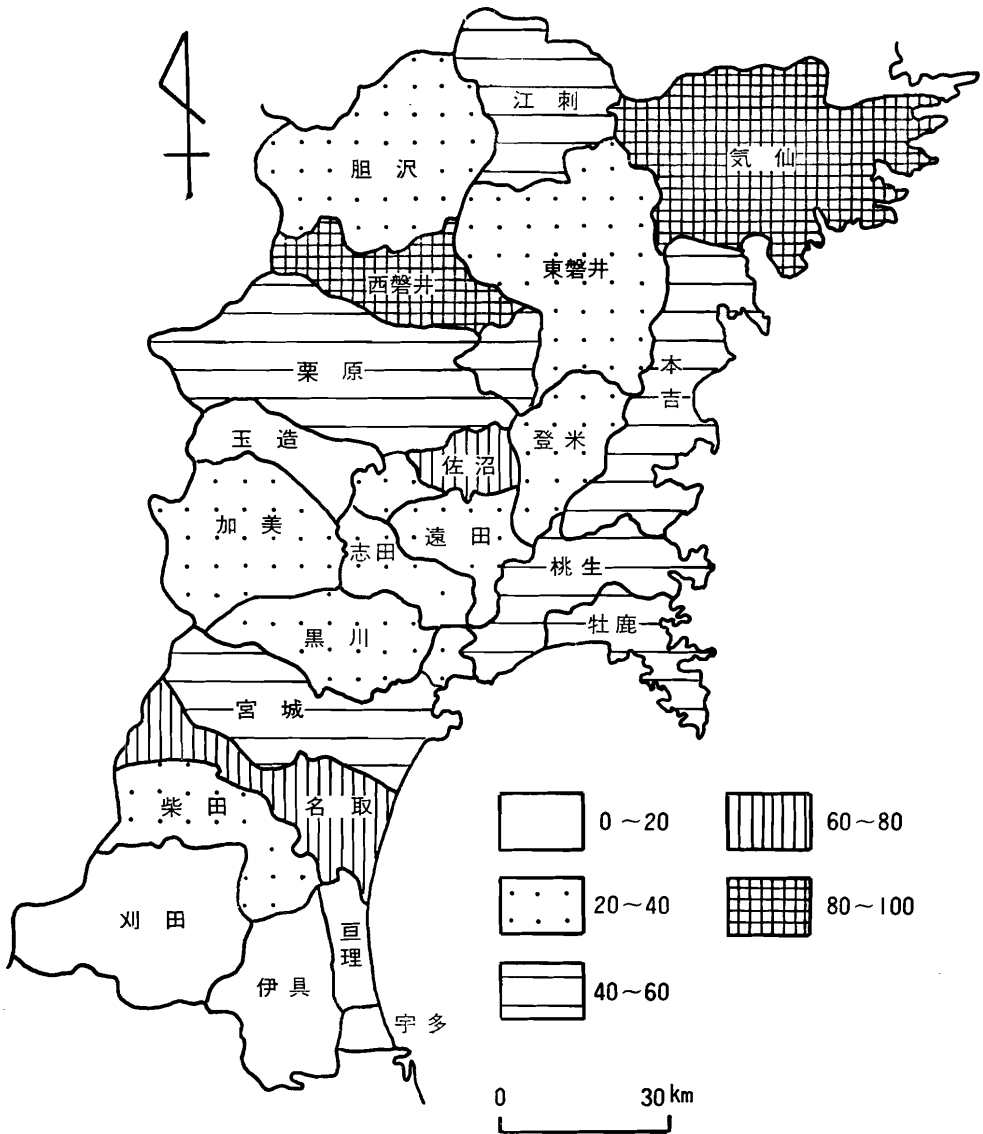


図6. 安政3 (1856) 年における各郡の蔵入地率 (%)  
一部は郡単位の集計ではない

資料: 「宮城県史2」

タイプが生じた原因について考察する。

初めに、近世末の蔵入地の分布をみると図6のようになる。当時の仙台藩の実高94万石余（表高、奥州分60万石）のうち蔵入地率は38.5%である。給所の比率が高い郡には大身の侍が規模の大きな要害に居住していたため、Bタイプとなっている。蔵入地率の高い西磐井郡は一関藩の知行地であり、実質的には大身侍のそれと同じでBタイプを示している。要害系の集落は家中屋敷と町屋などからなるが、家中屋敷地区の規模は家臣の石高とまた町屋地区の規模は集落の規模および周辺の人口と正比例関係にあり、人口規模が大きかっただけでなく商業などの機能も集中していたと考えられる。これに対して蔵入地の比率が高いか、それが低くても規模の大きな要害系の集落がなかった郡では、集落は均等に分布しDタイプを示すと考えられる。旧要害系の集落でも家中侍が廃藩置県後に転出したところではBタイプとはならないであろう。

以上、人口規模のみから分布をみてきたが、これを集落の機能という面から検討する。資料の制約上、A、B、Cそれぞれのタイプの、郡内での経済活動を示すと考えられる商業の指標により概観する。A、B、C各タイプの例として宮城郡、刈田郡、柴田郡をとりあげ、それぞれ陸前国宮城郡地誌（明治20年）、磐城国刈田郡地誌（明治18年）、陸前国柴田郡地誌（明治17年）<sup>3)</sup>を検討した。共武政表とは5～8年のへだたりがあるが、概観はできるのではないかと考えた。それぞれには行政単位ごとに商を業とする戸数が記載されている。これらは行商なども含むため集落の商業活動を正確に表すとはいえないが、ひとつの指標にはなると思われる。

宮城郡では、商業戸数のうち89%が仙台に集中している。しかし、仙台と沿岸部に分布する漁業集落とを除けば、ほぼ一定の間隔で商業のさかんな集落が分布している。Bタイプの刈田郡では、白石に71%が集中しているが、その6km北に位置する宮という旧奥州街道の宿駅（郡内で第4位の人口）にも27%が集まり、集落内の90%ほどが商戸と記載されている。Cタイプの柴田郡では人口規模で上位3集落に商戸がほぼ均等に分散している。これらは旧奥州街道の宿駅と、旧要害系の村田である。

以上のように人口規模からみるといくつかの郡のタイプに分けられるが、商業活動に関しては現在とは異なり、商業中心地は強い階層構造を形成せず比較的均等な分布を示していたといえるであろう。これは日常的な交通手段としては、徒歩が中心であったため移動距離が制約されていたことが要因といえる。しかし、このあとの鉄道、さらに自動車への交通手段の変化は、中心地の階層構造の変革をもたらすことになった。旧仙台藩領について、旧要害系の集落が明治期以降果たした役割としては、行政機関が多く設置されたといえるようである。

#### 4. おわりに

以上、旧仙台藩領の明治前期における輻輳地についてまとめると以下のようなことになる。

(1) 順位規模曲線によれば旧城下町仙台および港町石巻という旧藩領内の中心地の優位性は認められるが、両者を除けば上に凸の形をしており中規模の輻輳地の発達が見られる。人口規模の大きな輻輳地は、近世において家中屋敷と町屋などからなる旧要害系の集落が多い。

(2) 郡を単位としてみると人口規模により4つのタイプに分けられるが、これは近世の給所の分布、なかでも大身侍の所領分布に規定されている。

(3) しかし、商業地の分布は比較的均等であり、徒歩交通が中心であったという明治前期の性格を示している。

現代都市の分布および機能を分析する場合、現代の視点だけでは明らかにはできない部分が残される。つまり、歴史的要因が歴史的都市の多い日本などにおいてはみのがせない点である。その時でも、近世と現代とを単純に比較することには問題がある。これまでも地理学の立場からの明治前期についての全国的な展望が行われてきたが、それらの位置づけの上に各地域について現代に至る具体的な研究がさらに積み重ねられていかなければならないであろう。

本論は、1982年度東北地理学会春季学術大会で発表した内容に加筆し、修正したものである。

## 注

- 1) 参謀本部編 共武政表(明治12年) 柳原書店復刻版 1978年
- 2) 日本地名大辞典 3 岩手県 角川書店 1985年  
同上 4 宮城県 角川書店 1979年
- 3) 以上の3郡誌, 宮城県図書館所蔵

## 参考文献

- 押野 昭生(1958): 明治前期の地理的資料若干 人文地理10-4, 45~49  
黒崎 千晴(1980): 明治前期における中心地の階層的配置について 一秋田県を事例として一  
高野史男編著: 都市形成の地理的基盤 大明堂 62~73  
斎藤 鋭雄(1975): 仙台藩に於ける蔵入地と知行地 東北歴史資料館研究紀要 1, 53~74  
佐々木慶市(1974): 仙台藩の地方知行制 東北学院大学論集(歴史学・地理学) 4, 49~75  
西村 睦男(1980): 藩領人口と城下町人口 歴史地理学 111, 1~15  
藤岡謙二郎(1968): 日本の都市 大明堂  
古島 敏雄(1961): 明治期における都市の動向 地方史研究協議会編: 日本の町Ⅲ 雄山閣 23~48  
森川 洋(1962): 明治初年の都市分布 人文地理 14-5, 44~63  
森川 洋(1967): 明治初年における広島県の都市とその機能 史学研究 99, 1~22  
矢守 一彦(1970): 幕藩社会の地域構造 大明堂